

ポーランド語の与格を伴う非人称再帰構文：フランス語の受動的再帰構文との対照において

井口, 容子
広島大学大学院総合科学研究科：教授

<https://doi.org/10.15017/1430747>

出版情報：Stella. 32, pp.111-121, 2013-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

ポーランド語の与格を伴う非人称再帰構文 ——フランス語の受動的再帰構文との対照において——

井 口 容 子

1. はじめに

フランス語の代名動詞、ドイツ語の再帰動詞など、再帰代名詞を用いた構文が、純然たる「再帰」のみならず、相互・受動・自発 (anticausative) など多様な機能を示すという現象はヨーロッパの言語に広く認められる。近年、言語学において、これらはヴォイスのカテゴリーのひとつである中相 (中動態 middle voice) をなすものと見なすことが多い¹⁾。筆者はフランス語の再帰構文 (以下、「代名動詞」を含む構文を「再帰構文」と呼ぶことにする)、特に受動的用法にかんして、井口 (2004, 2007, 2010) 等において考察を重ねてきた。

スラブ語派の言語においても、中相範疇を形成すると考えられる再帰構文が見られる。ロシア語の「-ся 動詞」やポーランド語の「się 動詞」などがそれにあたる。本稿においては、ポーランド語の się を用いた非人称の再帰構文、なかでも特に与格を伴うものに注目し分析してみたい。フランス語の受動的再帰構文の特性を考える上で、当該の構文が興味深い示唆を与えるものと思われるからである。その上でフランス語の受動的再帰構文と比較・対照しながら考察をおこないたい。

2. ポーランド語の się 構文

ポーランド語における再帰接語代名詞 (reflexive clitic) の się を用いた構文は、以下のような機能を持つ。

(1) 再帰

Janek ubiera się.
John dresses REFL
'John gets dressed.'

(Rivero & Sheppard 2003)

(2) 相互

Kochają się.

love REFL

'They love each other.'

(木村・吉上 1973)

(3) 自発 (anticausative)

Szklanka się rozbiła.

glass REFL broke

'The glass broke.'

(4) 受動 (いわゆる「中間構文」に相当)

Te samochody prowadzą się łatwo.

these cars drive Refl easily

'These cars drive easily.'

(以上, Rivero & Sheppard 2003)

(1)-(4) が示すように、再帰・相互・自発・受動という中相のほぼ全領域を射程におさめるものであるが、これに加えて、スペイン語・イタリア語などのロマンス語に見られる、いわゆる「非人称の se / si」の構文に相当する用法を持つ。(5) がその例である。

(5) 非人称の się (impersonal się)

a. Tutaj się pracuje sporo.

here REFL work_{3s} much

'Here people work a lot.'

b. Tę książkę czytało się z przyjemnością.

this book_{ACC} read_{PAST,NEU} REFL with pleasure

'People read this book with pleasure.'

(以上, Rivero & Sheppard 2003)

この構文は、フランス語の on やドイツ語の man のような不定主語 (indefinite subject) をもつものとして解釈される。この構文が非人称であることは、動詞のとるデフォルトの形態が示している。すなわち現在時制の場合は (5a) に見られるように 3 人称単数形をとり、過去時制の場合は (5b) のように中性の

形態をとるのである。また自動詞・他動詞ともにこの構文をとることができる。(5a) は自動詞, (5b) は他動詞の例である。他動詞の場合, 「対象 theme」の役割をになう名詞句は対格におかれる (ex. (5b) の *Tę książkę*)。この点において (4) のような受動的用法とは大きく異なる。なお「非人称の *se / si / się*」の用法はフランス語の再帰構文には見られない。

3. 与格非人称再帰構文

ところで, ポーランド語の *się* を用いる非人称構文には, 次のような与格を伴うタイプのものが存在する。

(6) *Tę książkę czytało mi się z przyjemnością.*
 this book_{ACC} read_{PAST.NEU} me_{DAT} REFL with pleasure
 'I read this book with pleasure'

(7) **Jankowi** *pracuje się* dobrze.
 John_{DAT} work_{3S} REFL well
 'John works well.'

(以上, Rivero & Sheppard 2003 : 97)

(8) *Tę książkę pisało mi się ciężko.*
 this book_{ACC} wrote_{NEU} me_{DAT} REFL hard
 'I wrote this book with difficulty.'

(9) **Marysia** *mówi, że dobrze jej się szyje bluzki z jedwabiu.*
 Mary_{NOM} says that well her_{DAT} REFL sew_{3S} blouses_{ACC} from silk
 'Mary says that making/sewing blouses of silk is easy for her.'

(以上, Rudzka-Ostyn 1996 : 366)

先に「非人称の *się*」の例として示した (5b) と, 例文 (6) を比較すると, いずれもデフォルトの動詞形態と再帰接辞 *się* を持つ非人称構文であり, 対格の目的語 (*Tę książkę*) を従えている点においても共通しているが, ただひとつ, (6) は与格補語の «*mi*» を伴っている点において異なっている。(7)-(9) も同様に, 太字で示した与格補語を伴っている。これらの与格補語の指示対象は, 動詞が表す行為を行う「動作主」に相当する。したがって, いわゆる「非人称の *se / si / się*」構文の最も重要な特性ともいえる「不定主語 indefinite

subject」の解釈は、与格を伴うタイプの(6)-(9)には存在しない。

4. 「自発」との関連

本稿では、このポーランド語の与格を伴うタイプの非人称再帰構文（以下、「与格非人称再帰構文」）を「自発」の概念に関連付けて考えてみたい。Rivero & Sheppard (2003)によると、(6)-(9)に見られる与格を伴う非人称再帰構文は、ポーランド語文法において「非意図的状态構文 involuntary state construction」と呼ばれているものだという (p. 97)。また Rudzka-Ostyn (1996)は、上記(8)(9)に見られる与格を「非意図的経験者 involuntary experienter」を表すものとする (p. 366)²⁾。

与格非人称再帰構文の意味的特徴は以下のようにまとめることができる。与格の指示対象が行為者として参与している出来事ではあるが、当人の意志をはなれて、あたかも自然発生的にその事態が生じたかのようにとらえられているのである。(7)を例にとると、「よく働ける、あるいは仕事が気持ちよくできる、そういう事態が Janek (与格: Jankowi) において生ずる」ということになる。過去時制におかれている(6)は「この本を楽しく読めた(そういう事態が自らに生じた)」という表現といえるであろうし、(9)は「シルクのブラウスってかたんに縫えちゃうのよ、と Marysia は言う」というほどのニュアンスになると思われる。この点でこの構文は、一種の「自発」の表現であると言える。

日本語に目を転ずると、国文法で「自発」と呼ばれる表現がある。この表現は今日においては「思われる」「俥ばれる」「待たれる」など思考・感情にかかわる mental activity に対象がほぼ限定されているが、古い時代にはより具体的な行為にも用いられていた。(10)は森山(1988)が収録している『更級日記』からの例である。

(10) ともかくもいふべき方も覚えぬまに……とや書かれにけむ

(森山 1988 : 133)

また本居春庭は『詞の通路』において「おもはるる」「いはるる」などは第5段「おのつから然せらるる」として分類しているが、同じ第5段に「しりそかるる」「ふせかるる」「すすまるる」等も含めている³⁾。これら具体的行為を表す動詞による「自発」と、ポーランド語の(6)-(9)は近いものであるように思

われる。日本語の自発の場合は、行為を行なう人物を明示的には表さないことが多いが、あえて表す場合には(11)のように与格の形をとる。

(11) しかしわたしにはどうしても春と秋が無いように思われる。

(魯迅『鴨の喜劇』[井上紅梅訳, 青空文庫])

さらに次の(12)は、ドイツ語において「非人称中間構文」とよばれるものであるが、この文もやはりポーランド語の(6)-(9)や、日本語の自発の構文に近い性質のものであるということが出来る。ここにおいても非意図的行為者は与格(mir)で表されている。

(12) Es schreibt sich mir hier gut.

it writes REFL me_{DAT} here well

'I can write well here.'

(Admoni 1970)⁴⁾

5. フランス語の受動的再帰構文の2つの下位クラス

ここまでポーランド語の非人称再帰構文について考察してきた。本節以降(5-8節)においては、この構文とフランス語の受動的再帰構文を比較・対照しながら、さらに考察を進めたい。

筆者は井口(2004, 2005, 2007等)において、フランス語の受動的再帰構文には「中間構文型」と「未完了受動型」の2つの下位クラスを設けるべきであると主張した。このことは以後の考察にも重要なかわりをもってくるので、あらためて概観しておこう。

(13) Ce livre se lit facilement.

「この本は簡単に読める」

(14) Le caviar se mange avec de la vodka. (Ruwet 1972)

「キャビアはウォッカとともに食べられる」

上記の(13)が「中間構文型」、(14)が「未完了受動型」のそれぞれ代表的な例である。「中間構文型」は、英語やドイツ語などに見られる、いわゆる「中間構文」に相当するものである。「未完了受動型」は以下の(15)が示すように、英語等においては許容されない動作主指向の副詞的表現と共起できる。

(15) Le polyester se nettoie avec précaution. (Yamada 2002)

「ポリエステルは注意して洗われる / 洗わねばならない」

Cf. *Polyester cleans *carefully*. (Fellbaum 1985)

さらにモダリティにかんしても相違が見られ、「中間構文型」が「可能」を含意しているのに対し、「未完了受動型」は「規範」のモダリティを含意するもの〔(15) (16)における「洗わねばならない」「飲むものだ」という解釈〕、あるいはモダリティは特に含意せず、習慣的な事象を述べるもの〔(17)〕も見られる。

(16) Le vin blanc se boit frais.

「白ワインは冷やして飲まれる / 飲むものだ」

(17) Le français se parle aussi au Canada.

「フランス語はカナダでも話されている」

6. 「未完了受動型」と「非人称の se / si / się」

5節でみたような相違点をふまえ、井口 (2007) は中相範疇 (middle voice) の機能拡張の過程において、「中間構文型」が比較的「自発」に近い段階にとどまっているのに対し、「未完了受動型」は「受動」の領域に大きく踏み出しているものとした。その上で、スペイン語やイタリア語などのロマンス語に見られる「非人称の se / si」は、意味的側面において「未完了受動型」に類似しているものであり、当該言語において未完了受動型に相当する構文から拡張したものであるか、という仮説を示した。ポーランド語の「非人称の się」にかんしても同様である。

Siewierska (1988) は Pisarkowa (1984)⁵⁾ を援用し、ポーランド語において「対象 theme」を対格ではなく主格で表す、「受動」とみなすべき用例が見られるのは、16-17世紀ごろまで、新しいものでも19世紀のテキストあたりまでと述べる (p. 283)。Rivero & Sheppard (2003) も、(18)に見られるような「受動」の用法は「古風 obsolete」だと考える (p. 99)。

(18) Dom szybko się zbudował.

house_{NOM} fast REFL built

'The house was built fast.'

Siewierska は、ポーランド語の「非人称の się」をはじめスラブ系の言語に広く見られる、不定の主語の存在を含意する非人称再帰構文を、受動的用法が再分析 (reanalysis) を受けて生まれたと考えている。そして theme を主格で表す (18) のような用例がすでに古風なものとなっているポーランド語においては、

この再分析は完了したものと見なす (p. 266)。

一方、「受動的再帰構文」であっても、例文(4)(以下に再掲)に見られるような、「中間構文型」と考えられる用法は現代でも使用されている。Rivero & Sheppard (2003) は、(4)を«middle», (18)を«passive」と呼び、2つの用法を区別している。

(4) Te samochody prowadzą się łatwo. (再掲)
 these cars drive REFL easily

'These cars drive easily.'

(Rivero & Sheppard 2003)

このことは、「非人称の się」は「受動的再帰構文」のうちでも、「未完了受動型」のものから拡張されたとする井口(2007)の主張を裏付けるものであると思われる。ポーランド語において「非人称の się」に移行したのは「未完了受動型」の受動的再帰構文であり、「中間構文型」はそのまま存続しているのである。

7. 与格非人称再帰構文と「中間構文型」の類似性

一般の「非人称の się」の構文にかんしては、上記のように「未完了受動型」との意味的類似性および拡張の過程における連続性が窺えるが、本稿で論じている与格を伴うタイプの非人称再帰構文については少し事情が異なる。3節でみた(6)-(9)のような与格非人称再帰構文の例文の意味をあらためて考えてみると、これらは「自然発生的な事態の生起」を述べると同時に、その事態の出現の難易性(例文(8)(9))や、いかにその事態が心地よく進んでいくか(例文(6)(7))に言及しており、「可能」のモダリティを含意しているといえることができる。この点で、むしろ「中間構文型」に近い。

Rivero, Arregui & Fraćkowiak (2009) は、与格非人称再帰構文においては *dobrze* 'well', *ciężko* 'hard', *z przyjemnością* 'with pleasure', あるいは次の文に見られる *wesoło* 'happily' のような副詞的表現がほぼ義務的とする。

(19) *Wesoło* nam się podróżowało po tej pięknej krainie.
 happily we_{DAT} REFL traveled_{NEU} over this beautiful country
 'We enjoyed traveling all over this beautiful country.'

(Dąbrowska 1997)

この点においても、*facilement*, *difficilement*, *bien* などの副詞的表現を多くの

場合に伴う「中間構文型」に似ている⁶⁾。

z przyjemnością ‘with pleasure’については、動作主指向の副詞的表現であって、中間構文型に付されるものとは異なるのではないか、という批判があるかもしれない。しかしそれは当たらない。この例文において z przyjemnością が表しているのは、「嬉々として」「喜んで」と訳されるような「動作の様態」ではなく、「動作主の意図とはかかわりなく、楽しくことが進む」といった意味であり、「スムーズに事態が進行する」というのに近いからである。

さらに Rivero & Sheppard (2003) によると、(20b) のような副詞的表現を付すという手段に加えて、(20c) のように文を「否定」におくことによっても容認可能性が向上することもあるという。

- (20) a. *Spało mi się.
 slept_{NEU} me_{DAT} REFL
 ‘I slept.’
 b. Spało mi się *świetnie*.
 ‘I slept comfortably.’
 c. *Nie* spało mi się.
 ‘I could not sleep.’

(Rivero & Sheppard 2003 : 137)

これも英語の中間構文における、以下のような例を想起させる。

- (21) This rock does not cut.
 (Condoravdi 1989 : 20)

英語の中間構文の場合も、否定文の場合は副詞的要素が義務的ではなくなるのである。

8. 与格非人称再帰構文の事象叙述的性格

ここまで、ポーランド語の与格非人称再帰構文と、いわゆる中間構文の類似性を指摘してきたが、両者の間には「叙述の類型」をめぐる大きな相違が見られる。

Rivero, Arregui & Frackowiak (2009) は、ポーランド語に見られるタイプの与格非人称再帰構文を «factual» と呼ぶ。呼称が示すように、この構文においては与格の指示対象を動作主とする出来事 (event) の生起が前提とされてい

る。たとえば例文(6)(以下に再掲)では、「私がこの本を読んだ」という出来事が過去において生じたことが含意されている。

- (6) *Tę książkę czytało mi się z przyjemnością.*
 this book_{ACC} read_{PAST,NEU} me_{DAT} REFL with pleasure
 'I read this book with pleasure'

Rivero & Sheppard (2003) は、仮に(6)の後に 'but I did not read it.' を意味する文を続けると、矛盾をきたすことになるという (p. 137)⁷⁾。(8)(19) や (20b) についても同様である。

一方、「中間構文型」の受動的再帰構文は、属性叙述的性格であることが知られている。

- (22) a. *Ce livre se lit facilement.* [= (13)]
 「この本は簡単に読める」
 b. *Cette étoffe se repasse rapidement.*
 「この布はアイロンをあてやすい」

(22a-b) のフランス語の例文は、具体的な出来事を記述する文ではなく、「この本 *ce livre*」および「この布 *cette étoffe*」の属性を述べている文である。そして属性叙述文であるがゆえに中間構文型の受動的再帰構文は、点括弧の動詞を許容しないというアスペクト的な制約を課せられている。フランス語でいえば、複合過去形におかれた例は非常に稀である。

これに対してポーランド語に見られる与格非人称再帰構文は、事象叙述文であり、上述の多くの例文がそうであるように、過去に起きた具体的な出来事を記述しうる。

9. 結語

ここまでポーランド語の非人称再帰構文のうち、与格を伴うものに特に注目し、フランス語の受動的再帰構文と比較・対照しながら考察してきた。「非人称の *się*」と呼ばれる一般の非人称再帰構文が、その意味的側面においてフランス語の「未完了受動型」の受動的再帰構文に酷似しているのに対し、与格非人称再帰構文の方はむしろ「中間構文」との共通点が認められる。たしかに「叙述の類型」にかんしては「事象叙述/属性叙述」という大きな相違が指摘できる。しかしながら他方において、7節で指摘したように、共起する副詞的表現、モ

ダリテイ、否定文における副詞的表現の共起義務の解除など、類似した点を多く有することも確かである。

フランス語の受動的再帰構文を考える上で、ポーランド語の非人称再帰構文は非常に興味深い特性を示している。今後も考察を重ねていきたい。

註

- 1) Kemmer (1993), 柴谷 (1997) 等を参照。なお, middle voice の「中相」という訳語は柴谷 (1997) に従った。
- 2) Rudzka-Ostyn (1996) は以下の (i) (ii) に見られるような与格補語とならんで、与格非人称再帰構文に見られる与格を「非意図的経験者 involuntary experiencer」と呼んでいる。
 - (i) Ależ **mi** się *chce* jeść / pić / spać !
 how me_{DAT} REFL want_{3S} to eat / drink / sleep
 ‘My, how hungry / thirsty / sleepy I am !
 (I really feel like eating / drinking / sleeping)’
 - (ii) **Dzieciom** bardzo smutno / przykro / zimno.
 children_{DAT} very sad / sorry / cold
 ‘The children feel very sad / sorry / cold.’
 (以上, Rudzka-Ostyn 1996 : 365-366)
- 3) 本居春庭 (1828)『詞の通路』より。参考文献に記した須賀一好・早津恵美子編 (1995) に所収。引用箇所は同書 8 頁。
- 4) Admoni (1970) については筆者は未見。本文中の引用は坂本 (2002) による。
- 5) Pisarkowa (1984) については筆者は未見。本文中の引用は Siewierska (1988) による。
- 6) 英語の中間構文の場合、このような副詞的要素はほぼ義務的であることが知られている。
- 7) この「factual」という呼称は, Rivero & Sheppard (2003) 以来彼女らが指摘してきた、ポーランド語・チェコ語・スロヴァキア語における ISC (Involuntary State Construction) と、南スラブ語に属するスロヴェニア語・ブルガリア語におけるそれとの意味的な相違、より厳密に言えば真偽値における相違を示すために用いられたものである。

参考文献：

- Admoni, W. (1970) : *Der Deutsche Sprachbau*, 3rd ed., München, Beck.
 Condoravdi, C. (1989) : “The Middle : where semantics and morphology meet”, *MIT*

- Working Papers in Linguistics* 11, 16-30.
- Dąbrowska, E. (1997) : *Cognitive Semantics and the Polish Dative*, Berlin, Mouton de Gruyter.
- Fellbaum, C. (1985) : “Adverbs in Agentless Actives and Passives”, *CLS* 21-2, 21-31.
- 井口容子 (2004) : 「受動的代名動詞のモダリティーと中相範機能拡張のメカニズム」, 『ステラ』 23 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 1-17.
- 井口容子 (2005) : 「受動的代名動詞再考——叙述の種類とアスペクト——」, 『フランス文学』 25 (日本フランス語フランス文学会中国四国支部), 1-11.
- 井口容子 (2007) : 「代名動詞の意味・機能的ネットワーク——自発, 受動, 非人称——」, 『フランス語学研究』 41 (日本フランス語学会), 31-44.
- 井口容子 (2010) : 「フランス語の受動的代名動詞と中間構文」, 『ステラ』 29, 九州大学フランス語フランス文学研究会, 67-77.
- Kemmer, S. (1993) : *The Middle Voice*, Amsterdam, John Benjamins.
- 木村彰一・吉上昭三 (1973) : 『ポーランド語の入門』, 白水社.
- 本居春庭 (1828) : 『詞の通路』(須賀一好・早津恵美子編 (1995) : 『動詞の自他』, ひつじ書房, 7-12).
- 森山卓郎 (1988) : 『日本語動詞述語文の研究』, 明治書院.
- Rivero, M. L. & M. M. Sheppard (2003) : “Indefinite Reflexive Clitics in Slavic : Polish and Slovenian”, *Natural Language & Linguistic Theory* 21, 89-155.
- Rivero, M. L., A. Arregui & E. Fraçkowiak (2009) : “Anatomy of a Polish Circumstantial Modal”, *Formal Approaches to Slavic Linguistics* 18. (<http://aixl.ottawa.ca/~romlab/pubs/RiveroArreguiFra.2010.pdf>).
- Rudzka-Ostyn, B. (1996) : “The Polish Dative”, Van Bell, W. & W. Van Langendonck (eds), *The Dative, vol. I: Descriptive Studies*, Amsterdam, John Benjamins, 341-394.
- Ruwet, N. (1972) : *Théorie syntaxique et syntaxe du français*, Paris, Éd. du Seuil.
- 坂本真樹 (2002) : 「ドイツ語中間構文の認知的ネットワーク」, 西村義樹編『認知言語学 I : 事象構造』東京大学出版会, 111-135.
- 柴谷方良 (1997) : 「言語の機能と構造と類型」『言語研究』 112, 1-32.
- Siewierska, A. (1988) : “The Passive in Slavic”, M. Shibatani (ed), *Passive and Voice*, Amsterdam, John Benjamins, 243-289.
- Pisarkowa, K. (1984) : *Historia Składni Języka Polskiego*, Wrocław, Ossolineum.
- Yamada, H. (2002) : «Sur les deux types de la construction du verbe pronominal passif — la valeur normative et la restriction sur les éléments adverbiaux —», *Études de Langue et Littérature françaises* 80, 208-221.